

遺伝子組換え作物

遺伝子組み換え作物や食品については、最近の関心の高まりを象徴するように、かなり多数の関連書物が出版されている。

どの書を取り上げるべきか、大いに迷ったが、科学的見地から遺伝子組み換え作物の商品化が「環境にもたらす悪影響に焦点をしばった」本書を俎上に乗せることにした。したがってここでは食品の安全性の問題にはふれていない。それが重大な関心事であることは充分承知しているが、問題の拡散を防ぐ意味で、本書のように限局した課題設定による科学者の見解の方

が、この本質により接近出来ると考えたからである。予想にたがわず、遺伝子組み換え作物が生態系に決定的な悪影響を与えるという本書の内容は、淡々とした記述に関わらず、実に恐怖に満ちたものだ。遺伝子組み換え作物の誕生と商品化について、まだあまりに我々は無知であり、楽観的に過ぎるという思いを禁じ得ない。

本書の基礎となったのは、一九九一年に開かれた遺伝子組み換え植物に関するアメリカの専門家研究会(憂慮する科学者同盟)の報告書であり、その増補版が本書である。

『遺伝子組み換え作物と環境への危機』

ジェーン・リスラー、マーガレット・メロン著

阿部利徳、小笠原宣好、保木本利行他訳 (合同出版)

構成は六章からなり、イントロダクション、遺伝子組み換え作物とは、から始まり、環境に及ぼす危険性、その事前評価、商品化の国際的意味、と論述し、最後にアメリカ政策当局への勧告が行われている。総括部分の一、二章だけ読んでも良いし、各章の要約を読んでいっても概略の理解は可能だと思ふ。

緻密な内容の本書を要約すれば、遺伝子組み換え作物の商品化には、遺伝子組み換え作物自身の雑草化の危険性、および遺伝子が近縁種に拡散かつ連鎖する危険性

があり、生態系への悪影響、とくに遺伝的多様性の中心地への侵入とその喪失が極めて深刻に懸念されている。多様性の中心地は遺伝資源の貯蔵庫であり、将来の世界の農業生産にとって「死活的な重要性」を持っているとされるから、その喪失は人類の生存そのものの決定的危機へと結びつきかねないのである。しかもその多くは発展途上国にあり、こうした問題に無防備に近い。遺伝子組み換え作物は予知不可能な結合関係を多く含み、その事前評価は極めて不十分であり、蓄積的・連鎖的影響についての

科学的研究も包括的法規制もほとんど行われていないという。したがって、遺伝子組み換え技術の有用性は認めつつ、現段階では「遺伝子組み換え作物の無制限な自然界への放出は重大な損失を招く」ので、科学的に適切な規制を必要とする」と警告する。

なお、遺伝子組み換え作物の利用が世界の食糧危機の回避に貢献する可能性については、本書は否定的である。開発企業は利益を優先するから、発展途上国への供給には限界があり適合品種の育成に多くは期待できないのに加え、「農業分野におけるバイオテクノロジーの成果は、伝統的育種と比較してはつきりした優位性を示しているとはいえない」。仮に適切な作物への利用により農業生産性の向上が実現しても、「それは世界の飢えを招いている複雑な方程式のなかのたった一つの要因の改善でしかない」からである。

遺伝子組み換え作物の利用にはあまりにも未知な部分が多い。しかし実態は、企業と一部国家権力により不十分なアセスメントのままで数十品目が商品化されている。開発にあたる科学者の倫理観へ淡い期待を寄せながら、人類の未来という観点からの、さらなる学習と監視を怠ってはならないことを本書は教えている。

(一九九九年十月、二〇五頁、二、〇〇〇円)
(平井 隆)